

岡本綺堂
長田幹彦
集集

改造社
版

杉浦非水裝幀

「岡本綺堂集」目次

卷頭寫眞(照影)

序 詞(筆蹟)……………四

戲曲篇

俳諧 師……………五

正雪の二代目……………六

番町皿屋敷……………七

増補 信長記……………七

小梅と由兵衛……………六

わが家……………六

相馬の金さん……………一四

鳥邊山心……………一四三

無禮講……………一五一

讀物篇

維新小説……………一六〇
寺の門前……………一七〇

修禪寺物語……………一八三

兩國の秋……………二〇八

木曾の旅人……………二五二

火薬庫……………二六〇

こま犬……………二六七

雪女……………二七五

(附) 心太、天狗(二五) 夜泊の船、蟹(四六) ひるがほ、唐がら

し(七五) 風露集(一九七) 風露集(二二三) 風露集(三二四)

風露集四(五九) 風露集五(六九) 風露集六(八二) 風露

集七(一〇七) 三條大橋、天國(二五九) 風露集八(二六六) 風露

集九、木蓼(二七四) 風露集十、鶏(二八二)

年譜……………二八三

「長田幹彦集」目次

卷頭寫眞(照影)
序 詞(筆蹟)

夢 ゆめ	占 うらなひ	落 おち	町 まち	手 て	原 はら	名 な	話 はなし	夜 や	小 こ	霧 きり	木 き	扇 あふぎ	烏 くわ	浮 うき	濡 ぬ	島 しま	母 はは	淨 きよ	明 あき	寺 てら	横 よこ
.....																					
二六八	二六九	二九九	三三三	三三七	三五六	三八三	三九六	四三三	四七五	四九〇	五〇〇	五〇〇	五〇〇	五〇〇	五〇〇	五〇〇	五〇〇	五〇〇	五〇〇	五〇〇	五〇〇

(附) 歩く一(二六) 雑吟一(三六) 歩く二(三五) 歩く三(三九) 歩く四(三六) 歩く五(三九)

歩く六(四三) 歩く七(四四九) 祇園雑吟、雑吟二(六〇三) 江の島より(六〇八)

略歴・著作年表

六〇四

岡本綺堂集

文藝に黨派あるべき

兵燹も静も

京の踊あそび

結堂

俳諧師

登場人物 俳諧師鬼貫。路通。鬼貫の娘お妙。左官の女房お留。

元祿の末年、師走の雪ふる夕暮。浪花の町はづれ、俳諧師鬼貫のわび住居。軒かたむき縁朽ちたる破ら家にて、上の方には雪にたわみたる竹藪あり。下の方の入口には低き竹垣、小き枝折戸あり。となりは墓場の心にて、矢はり低き竹垣をへだて、其内に雪の積りたる石塔又は卒塔婆などみゆ。雪しづかに降る。寺の木魚の音きこゆ。

(下の方より近所の女房お留、竹の子笠をかぶりて出づ。)

お留。あゝ、よく降ることだ。寒い、寒い。(枝折戸をあけて聲をかける。) もし、御めんなさい。お留守ですか。

お妙。はい、はい。
(奥より鬼貫の娘お妙、十七八歳の美し

き娘、やつれたる姿にて、煤けたる行燈を點して出づ。)

お妙。おや、おかみさん。まあ、どうぞおさがり下さい。

お留。なに、こゝでいゝんですよ。(笠をぬぎて縁に腰をかける。) 寒いぢやありませんか。お妙。ほんたうにお寒いことでございます。(表を見る。) 今夜も積ることでございます。

お留。二日も降りつゝいた上に、まだ積られてはまつたく遣切れませんね。年の暮に斯う毎日降られては、どこでも随分困ることです。

お妙。なにしろ、おあがりなさいませんか。そこは防寒うございませうから。

(云ひながら下の方の爐を見かへれば、爐には火の氣がないので、お妙は困つた顔をしてゐる。)

お留。(それと察して。) いえ、もうお構ひなさるな。内の人もこの寒いので、持病の病氣が

起つたとか云つて、きのふも一昨日も仕事を休んでゐたのですけれど、もう數へ日になつて来て、お出入先から毎日の催促があるので、今日はたうとう朝から仕事に出て行つたんですよ。

お妙。この降るのに、まあ。

お留。尤も家のなかの繕ひ仕事ですから、雪が降つても出来るには出来るんですがね。それでも左官といふ商賣は辛いものだと滾し抜いてゐるんですよ。そりやまあ寒いときに泥いぢりをするんですから、どうで樂な仕事ぢやありませんけれど……。

お妙。(身にしみるやうに。) そりや全くでございますわねえ。

お留。さう云つても、我慢して稼いで貰はなければ、今日が過ぎませんからねえ。こちらのお父さんは今日はお休みですか。

お妙。いゝえ、今もおつしやる通り、やつぱり我慢して出て貰はなければなりませんので、今朝から稼ぎに出かけましたが、この雪では

難儀であらうと案じてをります。

お留。このお天氣ではほんたうにお困りでせうねえ。その代りにこちらの御商賣などは、かういふ日の方が却つて可いかもしれませ

よ。

お妙。(愁はしげに。) どうでございませうか。

お留。なにしろ、もう歸つてお出でなさるだらうから、早く火でも起して置いてあげたら何うです。外は随分寒うござんすよ。

お妙。さうでございませうねえ。(再び爐の方を見かへる。)

お留。(それを察したやうに又うなづく。) いえ、どこでも焚物には困るんですよ。この頃

のやうに炭や薪が高くなつては、その日暮し同様の者はまつたく凌げません。それで、實はね。(聲を低めながら墓場を指さす。) わたしもあすこへ焚物を見つげに來たんですよ。

お妙。あすこへ……。(仰上りのぞく。)

お留。あのお墓の古い塔婆を少し貰はうと思つてね。

お妙。お寺で呉れますかしら。

お留。(笑ふ。) 呉れるもんですか。どうで呉れないに決まつてゐるから、黙つて貰つていくんですよ。

お妙。まあ。

お留。だつて、お前さん。さうでもしなければ、この大雪の日に凍え死んでしまふぢやありませんか。佛様だつて大目に見てくれますわ。

お妙。でも、まさかそんなことは……。

お留。まあ、黙つておいでなさい。こゝの家へも持つて來てあげますから。

(お留は枝折戸の外に出て、あたりを見まはしながら生垣を突破つて墓場に忍び入るを、お妙は縁に立ちて不安らしく眺めてゐる。やがてお留は、新しいのと古いのとを取りまぜて澤山の塔婆を引つかへて出て、縁先へ引返して來る。)

お留。ねえ、お前さん。これだけあれば一時の凌ぎはつくと云ふものですわね。雪で濕つてゐるかもしれないが、兎も角もこれだけ置いて行きませうよ。

(お留は塔婆の雪を拂ひながら、その幾本かを縁に置く。お妙はやはり不安らしく眺めてゐる。)

お留。こちらなんぞはすぐ隣なんだから、焚物に困つたらいつでも斯うなさいよ。

お妙。でも、おかみさん。

お留。まあ可いから、お父さんの歸るまでに、早く暖かい火でもこしらへて置いておあげなさいよ。どれ、わたしも早く歸りませう。まあ、御覽なさい。些との間に又積りましたよ。(笠を持ちて起ち上る。)

お妙。氣をつけておいでなさい。

お留。はい、御免なさい。おゝ、降る、降る。

(お留は笠をかぶりて塔婆をかゝへ、挨拶してゆきかゝる時、上の方の竹藪の竹が二三本、凄まじい音して折れる。)

お留。(驚いて見かへる。) おや、竹が折れましたよ。

お妙。さつきから撓んで居りましたが、たうとう折れたとみえます。

お留。この雪ではたまりますまいよ。わたしの家なんぞも小さいから、うっかりすると壓潰されるかも知れない。はゝゝゝゝゝ。

(お留は笠を傾けて去る。ゆふぐれの鐘きこゆ。)

お妙。あのおかみさんはお墓からこんなものを持つて來て……。(塔婆を見る。) 竊と行つて歸して來ようかしら。(起ちかけて又躊躇する。) あゝ、雪が降る。お父さまはさぞお寒いことであらう。

(お妙はちつと思案の末、塔婆にむかひて合掌し、やがて思ひ切つて爐の側へかゝへて行き、それを爐に折りくべて燈石の火を打つ。塔婆は煙りて白き煙がうづまき廻る。表の雪は降りやまず。下の方よ

り俳諧師鬼貫、四十餘歳、導引のこしらへ、頭巾をかぶりて破れたる傘をさし、足駄をはきてとぼく／＼と歸り来る。お妙は透しみて縁に駈け出る。）

お妙。おゝ。お父さま。お歸りでございましたか。

鬼貫。どうもよく降ることだな。

お妙。さぞお寒かつたでございませう。

（お妙は手つたひて、鬼貫は傘をすぼめ、頭巾をぬぎ、からだの雪を拂ひて内にある。）

お妙。朝から少しも止まないのです、お寒くもあらうし、お困りでもあらうと、案じ暮してをりました。

鬼貫。（爐のそばに来る。）おゝ、爐の火が暖かさうに燃えてゐるな。きのふけふの大雪、外に出てゐるものも難儀だが、内にゐるものも難儀、殊に今朝から焚物は無し、内でもさぞ寒がつてゐるだらうと、おれも内を案じてゐた。

お妙。この寒いのには焚付はなし、お父さまがお歸りになつたらどうしようかと思つて居りますと、あの左官のおかみさんが……。（少し云ひ流みて。）これを持つて来てくれたの

でございます。

鬼貫。内に火のあるのは不思議だと思つてゐたが……。あゝ、これは塔婆ではないか。

お妙。はい。（もぢ／＼してゐる。）

鬼貫。（急に顔陰らせる。）これを左官のおかみさんがくれたのか。

お妙。はい。

鬼貫。おまへが自分で取つて来たのではあるまいな。

お妙。（あわてゝ。）まつたくあのおかみさんが取つて来てくれたのでございます。わたくしもどうしようかと思つたのでございますけれど……。（涙ぐむ。）お父様がさぞお寒からうと存じまして……。

鬼貫。さうか。（歎息する。）

お妙。どうぞ御勘辨なすつて下さいまし。（手をつく。）

鬼貫。今更叱つても仕方があるまい。まあ、湯でも沸す支度でもしてくれ。（やゝ嚴かに。）こんなことを再びするなよ。

お妙。はい。恐れ入りました。

（お妙は眼をふいて、湯を沸かす支度をする。鬼貫はしばらく爐の火を眺めてゐる。）

鬼貫。お妙。

お妙。はい。

鬼貫。米はなかつたな。

お妙。（溢りながら。）はい。

鬼貫。（さびしく笑ふ。）いや、聞くまでもない。米櫃に一粒の米もないことは今朝から判つてゐたのだ。おれもそれを知つてゐるから、今日もこの大雪のなかを一生懸命に歩いたよ。

（杖より笛を出す。）この笛を吹いて、大阪の町中を……。ふだんはおれの嫌ひな色町の女角まで、根よく流してあるいたが、馴染の薄いものはやつぱり駄目だ。どこでも呼んでくれない。

お妙。（歎息する。）さうでございませうねえ。

鬼貫。それでも一軒の小さい米屋でよんでくれたので、隠居らしい老人の腰を揉んで、二十文の銭を貰つて来た。

お妙。（ほつとして。）それはよろしうございまして。

鬼貫。それからもう一軒、質屋に呼び込まれて二十文、あはせて四十文がけふ一日の稼ぎだ。（財布より銭を出してみせる。）

お妙。それでもまあ結構でございました。鬼貫。（又もや寂しく笑ふ。）結構かもしれな

い。今の身の上では四十文の錢でも尊い。これがなければ親子二人が飢死だから。お妙。まったく尊いのでございます。(錢を財布に入れて押しいたぐ。)

鬼貫。いや、飢死の方がましかも知れない。おれも以前は大和郡山の藩中で、軽いながらも武家奉公をした身の上だ。若い時から俳諧がすきで、窮屈な武家奉公がどうも面白くないと思つてゐるうちに、おまへが十三の時に女房が死んだ。それから思ひ切つて武士を捨て、稚いお前の手をひいて、すみ馴れた郡山の土地を離れる時は、おれも流石にさびしいやうな心持がしないでもなかつた。「笠とりて跡ぢからなや春の雨」……それからこの大阪へ出て来たが、好きな俳諧を弄んでゐるばかりでは逆も世渡りの道が立たないので、思ひ付いた導引療治、これならば兎もかくも親子の口饒はならうと、初めは自分の家に看板をかけて見たが、ひとりも療治をたのみに来るものがないので、仕方が無しに按摩の笛を吹いて、毎日町中を流してあるくのも、かぞへて見るともう足かけ五年になる。家財も着類もみな賣り盡して、残つてゐるのは親子二人のからだばかりだ。

お妙。(慰めるやうに。)その不足勝のあひだにも、俳諧の道に心をかたむけて、月雪花を樂むのが風流の極意ではございませんか。

鬼貫。(うなづく。)それはおれも知つてゐる。

お妙。清貧を樂むとか、ふだんから仰しやるのは、こゝのことでございせんか。

鬼貫。清貧を樂む……。 (みづから嘲るやうに。)

おれも今まではさう思つてゐた。さう思へばこそ家代々の祿をすてゝ、自分の好きな俳諧師にもなつたのだ。しかし今のおれ達の身の上は、清貧などといふことを通り越して、あんまり慘め過ぎるではないか。月雪花を樂む風流の極意もこの世に生きてゐればこそで、おれ達はどう生命があぶない。おれ達はその日その日の糧にも困つてゐる。あしたの命もおぼつかないほどに飢に迫つてゐる。むかしの鬼貫ならば、この雪の日には是非とも一句あるべきところだが、今日の鬼貫は歌も俳諧もあらばこそ、どうしたら今夜の米代を稼げるか、あしたの薪代を稼げるか、どうしたら親子ふたりの露命をつなげるかと、唯それはかりに屈託しながら、大雪に埋もれた師走の町を一日さまよひ歩いてゐたのだ。大和も寒いところであつたが、浪花の冬も身に

しみるな。

(お妙はうつむきて悲しげに聴きゐたるが、やがて湯の沸きたるに心づきて、茶碗につぎて父にすゝめる。鬼貫は徐かに湯をのみて又考へる。)

鬼貫。おゝ、さうだ。たしか去年の暮であつた。やつぱりこんな寒い日であつたが、おれはこの行燈の灯をちつと眺めてゐるうちに、つい一句浮んだ。「ともしびの花に春待つ庵かな」——その頃はおれの心にもまだ餘裕があつて、春を待つといふ樂みがあつたと見える。その樂みも今は消えた。

お妙。え。

(お妙はいよく悲しげに父の顔を見つめる。鬼貫はうつむきて溜息をつく。雪風の音して、竹藪の竹二三本又もや折れる。その音に鬼貫は顔をあげて庭を見かへる。)

鬼貫。竹が折れたな。

お妙。さつきからたび／＼折れるやうでございます。

鬼貫。これほどの大雪に壓されては、強い竹も流石にたまるまい。堪へるだけは堪へても、積る重荷に壓されて、倒れるもある、折れ

るもある。(ちつと思案して氣を換へる。)これ
お妙。今夜の米を買つて來なければなるま
いな。

お妙。ほんにさうでございます。これからすぐ
に行つてまゐりませう。

鬼貫。油はどうだ。(行燈を見かへる。)い
や、四十文の錢で色々の買物も出來まい。油
が盡きたら雪あかりでも事は濟む。兎も角も
その錢で米と青菜でも買つて來い。

お妙。はい、はい。

(お妙は財布を帯にはさみて起ち上り、奥
より風呂敷を持ち出て出づ。)

鬼貫。あゝ、いつまでも降ることか。日が暮れ
て路が悪い。氣をつけて行けよ。

お妙。はい。氣をつけてまゐります。

(お妙は父の破れ傘を持ち、着物の袂を
からけて、素足にて雪のなかを行きかゝ
る。)

鬼貫。これ、素足では冷たからう。穿きにくか
らうが、おれの足駄を穿いてゆけ。

お妙。(少し躊躇して。)何、すぐそこでござい
ますから……。

鬼貫。すぐそこでも素足では堪るまい。構はず
に穿いてゆけ。

お妙。では、拝借してまゐります。

(お妙は父の足駄をはき、傘をかたむけて
下の方に立去る。雪風の音。鬼貫は立つ
て縁先より娘のうしろ影を見送りゐるた
が、やがて行燈をよきところに直して、小
さき古机を持ち出し、しづかに筆を執り
て懷紙に何か書きはじめる。雪の音、
木魚の音。下の方より俳諧師路通、三十
餘歳、乞食の姿にて破れたる蓑をまとひ、
古手拭をかぶり出て出づ。)

路通。(門よりのぞく。)この雪の日に難澁いた
すものでございます。どうぞお慈悲に一文遣
つてください。

鬼貫。(書きながら見かへる。)氣の毒だが難澁
はお互ひの身の上で、一錢の施しも出來ない。
どこか外の家へ行つてくれ。

(云ひすて、鬼貫は矢はり書きつづけて
ゐる。路通は伸びあがりて内を覗き、な
にか考へながら下の方に立去る。鬼貫は
やがて書き終りて筆を置き、丁寧に紙を
たゝみて机の上に置く。それより押入を
あけて袋に入れたる脇差を取り出し、鞘を
はらひて行燈の灯に照し視るとき、下の
方よりお妙は風呂敷包みをかゝへて歸り

來り、門口より内をのぞきて俄にたちど
まり、不安らしくうかどひゐる。鬼貫は
破れたる半屏風を逆に立てまはして、そ
の蔭に這入る。その途端にお妙は傘も包
みも投げ出して内へ駆けあがり、屏風を
押倒して父の手に取りすがる。)

お妙。(聲をふるはせる。)お父さま。どうなさ
るのでございます。

鬼貫。お妙。もう歸つたのか。

お妙。こんな刃物を持つて、お前はどんななさ
るのでございます。

鬼貫。譯はそこに書いてある。それを讀めば判
ることだ。

お妙。いゝえ、そんなものを讀んではゐられま
せん。もし、お父さま。おまへは何で自害な
さるのでございます。

鬼貫。叱つ、靜かにしろ。

お妙。いゝえ、靜かには出來ません。まあ、兎
も角もその刃物をお渡しください。

(たがひに争ふ間に、下の方より路通は
再び出て來り、門口よりうかどひゐる。
お妙は一生懸命に父の手より刃物を奪
ひとりて泣く。)

鬼貫。これ、靜かにしろと云ふのに……。なる

ほど叱咤するの道德だが、たとひ自害しないでも俺達はどう生きてはゐられない…。よく考へてみる。さつきも云ふ通り、あしかけ五年の浪々に、わづかばかりの野へは勿論、家財も着類もみんな賣り盡して、導引探療治にまで身を落したが、それでも世渡りは出来ないで、先月から三度の飯も満足に食つたことがない。これで幾日もついたら、親子ふたりが抱きあつて飢死するより外はあるまい。考へてみても怖ろしいことだ。

お妙。飢死するのが怖ろしさに、いつそ自害すると覺悟したら、なぜわたくしにも打ち明けて下さいませ。お前に捨てゝ行かれたら、あとに残つたわたくしは何うなると思ふのでございます。やつぱり飢死するより外は無いでございます。泣く。

鬼貫。いや、おまへと俺とは違ふ。お前はまだまだ若い身の上だ。いつそ自分一人ならば、どこへ奉公しても生きてゐられる。決して飢死するやうな心配はない。あの書置を人に見せれば、心ある人は憫れんでもくれるだらう。おれも好んで死にたくはない。それで今日まで我慢に我慢をして来たが、ほかの事とは諒が違つて、人間がどうしても食へないとなれば、

死ぬよりほかに仕様がな。生きたいと云つても生きてはゐられないのだ。判つたか。

お妙。いゝえ、どうしても死ぬほどならば、まだ生きてゆく道があらうかと存じます。唯今のお話をうかゞひますと、わたくしをお救ひ下さるために、お父さまが命をお捨てなさるやうに思はれまして、あんまり悲しうございます。わたくしはそんな不孝者になりたくはございません。かう云ふ時には、わたくしが死んでお父さまをお救ひ申さねばなりません。

鬼貫。馬鹿なことを…。お前を殺してどうなるものか。

お妙。ほんたうに死ぬのはございませ。唯今お父さまは何處へ奉公してもと仰しやいました。その奉公にまゐるのでございます。

鬼貫。奉公にゆく…。

お妙。はい。(決心したやうに涙を拭く。)奉公にまゐります。と云つて、お父さまに御不自由はさせません。わたくしに代つて朝夕のお世話を致すやうな、下女でも下男でもお雇ひ入れなすつて下さいまし。

鬼貫。その日の暮しに困る人間が下女や下男を置く。そんなことがどうして出来ると思ふのだ。(娘の肩に優しく手をかける。)おまへは少し取返させてゐる。まあ、まあ、おちついてよく考へるが可い。

お妙。(父の膝に手をかける。)もし、お父様。わたくしは奉公にまゐりまして、お父様に御不自由のないやうなお金を工面いたします。

鬼貫。む。

(鬼貫は臍に落ちぬやうに考へながら、娘の顔をぢつと視る。お妙の眼からは涙が流れる。)

鬼貫。(俄に思ひ付いて。)あ、おまへは勤め奉公にでもゆく氣か。

お妙。はい。(父の膝に泣き伏す。)

鬼貫。(あわたゞしく。)いけない、それは不可ない。お前にそんなことをさせられるものか。おれは今まで唯の一度もそんなことを考へたことが無かつた。おれはそんな無慈悲ではないのだ。(娘の手を掴んで叱るやうに。)おまへはどうしてそんな馬鹿な、間違つた考へを起したのだ。おまへが自分ひとりで考へ出したのか、それとも誰かに智慧をつけられたのか。む、あの左官のおかみさんに教へられたのか。大事の娘に勤め奉公をすゝめるなどとは、彼奴、思ひのほかの不埒

な奴だ。

お妙。(父に絶る。)いゝえ、左官のおかみさんの知つたことではございません。誰に教へられたのでも無く、わたくしが不意と考へ付いたのでございます。

鬼貫。何日そんなことを考へたのだ。

お妙。けふの雪をながめながら、お父さまが外で無だ寒いおもひをしていらつしやるだらうと思ひまして……。泣く。わたくしのやうなものでも勤め奉公に出ましたら、いくらか纏まつたお金も手に這入らうかと、不意と思ひつきましたその矢先へ、お父様が……。落ちたる脇差に眼をつける。こんな覺悟をなさいましたので……。

鬼貫。いや、判つた。なるほどお前の容貌ならば、廊へ身をしづめて相當の金にもなるだらう。おれも樂が出来るかも知れない。併しそんなことがどうしてさせられるものか。

お妙。お許しはございませんか。

鬼貫。(又もや激しく叱り付ける。)えゝ、念を押すまでもない。たとひ飢死をすればとて、わが子に遊女の勤めをさせるなどは、以ての外のことだ。これ、よく考へてみる。おれはお前が可愛ければこそ、自分を殺してお前

を生かさうとしてゐるのだ。そのお前を苦界に沈めて、俺がその金で樂々と生きてゐられるか。親の心、子知らずとはお前のことだ。あんまり腹が立つて涙も出ない。おれが奉公しろと云つたのは、たとひ水仕奉公にもしろ、眞直な正しい奉公をしろと云つたのだ。おれは死んでもどうなつても構はない、せめてお前だけは人間らしく生かして遣りたいと、苦勞してゐる俺の心がわからぬのか。

お妙。それはよく判つて居りますけれども、わたくしはどうしてもお父様を見殺しにすることは出来ません。

鬼貫。どうしても身賣をするといふのか。(詰める。)

お妙。(恐れるやうに。)では、わたくしは思ひ切つて身賣を止めませう。

鬼貫。むゝ、止めるか。それが當りまへだ。

お妙。その代りお父さまも……。死ぬのを止めて下さいまし。

(鬼貫は黙つてゐる。)

お妙。もし、この通りでございます。(手をあはせる。)

(鬼貫は矢はり考へてゐる。)

お妙。これほどに申しても聴いてくださらなけ

れば、お父様よりも先に、わたくしが寧ろ死んでしまひます。

(お妙はそこにある脇差を取りて、縁先へ走り出る。鬼貫はおどろいて押へる。)

鬼貫。これ、飛んでもないことをするな。

お妙。いゝえ、死なせて下さいまし。

鬼貫。はて、判らない奴だ。

(二人はたがひに争ふところへ、路通は枝折戸より入り來りて聲をかける。)

路通。あ、待つてくれ、待つてくれ。

(鬼貫とお妙はおどろいて見かへる。)

鬼貫。(答めるやうに。)お前は誰だ。なにに

路通。(笑ふ。)さつき來た物貫ひだよ。

鬼貫。物貫ひ……。

(路通は頬冠りを取る。)

鬼貫。(透して視る。)や、路通か。

路通。久振りだな。

鬼貫。まつたく久振りだ。

路通。その久振りのお客様が來たのだ。まあ、おちついて話さうではないか。

(路通は縁に腰をかける。鬼貫は早くその刃物を納めると娘に眼で知らせる。不意の客來にうろ／＼してゐたお妙も一

先づ刃物を鞘に納める。）

鬼貫。(なつかしげに。) なにしる、久しく逢はなかつた。そこは寒い。まあ、こつちへあがつてくれ。

お妙。むさ苦しうございますが、どうぞお通り下さいまし。

鬼貫。(爐を指さす。) こゝには火がある。寒さ凌ぎに早くあたるが可い。

(お妙は立寄つて路通の振をぬがせ、その雪を拂つて遣る。)

路通。いや、構つてくださるな。(鬼貫に。) なまじひ暖かい火などにあたると、却つてあとが寒い。宿無しはこゝで澤山だ。併しこゝらも随分積つたな。(庭を見まはし、そこに落ちたる傘と包みとに眼をつける。) や、こゝに色々抛り出してある。

(傘と包みとを拾ひて縁に置く。お妙は會釋して受取る。)

鬼貫。(お妙に。) 米を買つて來たのか。

お妙。はい。

鬼貫。丁度よい。青菜の粥でも焚いて、お客さまに御馳走しろよ。

お妙。はい、はい。

路通。それは何よりありがたい。久振りで御馳

走にならうかな。

お妙。唯今すぐに支度を致します。(包みを持ちて奥に入る。)

(鬼貫は茶碗に湯を汲んで来て、路通のまへに置く。)

鬼貫。郡山で別れて以來だから、もう足かけ六年になる。そのあとはどうした。

路通。この通りだ。はゝゝゝゝゝ。

鬼貫。再び昔の姿になつたか。

路通。おれはこの姿で東海道の松原に寝てゐるところを、芭蕉の翁に見つけられて弟子の一人に取立てられたが、人間並の生活はおれの性にあはないと見えて、師匠にさんぐ叱られた上に、二三年前から再び元の宿無しだ。乞食を三日すれば忘れられないと云ふが、まつたくこの方が氣樂でいゝやうだよ。

鬼貫。さうかなあ。(考へる。) それでも生きてゐられるかなあ。

路通。この通り生きてゐるのが論より證據だ。しかし俺はおれで、おまへに俺の眞似は出来ない。かうして平氣で生きてゐられるのは、この路通ばかりだらうな。

鬼貫。(感心したやうに。) さうかも知れない。

路通。おまへは斯うして湯をくれたが、おれは

減多にこんなものを飲んだことはない。喉が渴けばすぐにこれだ。

(路通は庭の雪を手を拵つて飲む。)

鬼貫。腹の減ることはないか。

路通。あるな。一日に一度ぐらゐしか食はない時がある。方々の家の門に立つても一文の錢だつて容易に恵んでくれるものではない。現にこゝの家でも斷られたからな。(笑ふ。)

鬼貫。それはお前と知らなかつたからだ。堪忍してくれ。

路通。斷られるのは馴れてゐるから、さのみ驚きもしなかつたが、どうも聞覚えのある聲だと思つたから、また引返して來てみると、いや大變な騒ぎで、いくら無頓着のおれもこれには流石に驚いたよ。鬼貫といふほどの風流人が何うも無分別なことだな。

鬼貫。無分別と云はれても仕方がない。おれはもう切端詰つたのだ。

路通。それが無分別だといふのだ。切端詰つたと云つても、なんとか生きてゆく道があるだらう。娘の方がおまへより些と利口のやうだ。

鬼貫。(少しく激して。) おれは自分の娘を賣つても生きてゐようとは思はないのだ。

路通。(笑ふ。)まあ、おちついて聴くがい。

誰がおまへの娘を賣れと云つた。おれはこの通りの獨り者だが、たとひ子供があつたにしても、その子供を賣飛ばして金にするといふ無慈悲な料簡にはなれさうもない。おまへの心は俺にもよく判つてゐるよ。

鬼貫。おまへも察してくるのか。

路通。む、察してゐる。そこで、おまへも命を捨てず、娘も身を賣らず、無事安穩に生きてゐられる智慧を授けてやらうと思ふのだが、どうだ、おれの云ふことをきくか。

鬼貫。おれも死なず、娘も身を賣らず。(疑ふやうに。)おまへにそんな智慧があるかな。

路通。あるから教へて遣らうといふのだ。一體、おまへたち親子が死ぬるとか生きるとか厭いでゐるのも、つまりは食へないからのことだらう。

鬼貫。(うなづく。)まつたくその通りだ。よくよくのことだと思つてくれ。

路通。さあ、そこだ。おれは獨り者の上に、人間もほんたうに風流に出来てゐる。第一に乞食馴れてゐるから、一日に一度ぐらゐしか飯を食はないこともある。いや、その一度も満足に食へないやうなこともある。それでも些

とも驚かないやうに仕込まれてゐるが、おまへ達は素人だ。唯の人間だ。腹の蟲が意氣地なく出来てゐるから、一度も飯を食はせない

とすぐにぐう／＼泣き出すといふ始末だ。おれならこの境界で平氣でもゐられるが、お前

たちには逆もその辛抱は出来まい。おまへ達に取つては腹の減るぐらゐ怖ろしいことはあるまい。そこで、おれが飯を食へることを教

へてやる。親子ふたりが満足に三度の飯さへ食へたら申分はない筈だ。

鬼貫。それは勿論だ。おれだつて別に榮耀や榮華がしたいと望むわけではない。たゞ無事に生きてゐられ、ばいゝのだ。

路通。それには斯うするのだ。よく見る。

(路通は庭の雪の上に指にて書く。鬼貫は行燈を持ち出して、縁の上から覗く。)

鬼貫。(氣色を變へる。)なんだと思つたら飛んでもないことを……。貴様はそれだから師匠にも破門されるのだ。瘦せても枯れても俺

も鬼貫だ。そんな馬鹿なことが出来ると思ふか。

路通。(平氣で。)それが悪いか。

鬼貫。善いか悪いか考へても判るではないか。實にどうも呆れた奴だ。そんな料簡だから貴

様は乞食の味が忘れられないのだ。もう貴様とは口を利かないから、早く出て行け。

路通。(再び縁に腰をかける。)なにをそんなに怒るのだ。

鬼貫。え、なんでもいゝから早く出て行け。さあ、出てゆけ。

(鬼貫は路通の腕をつかんで、縁より引掛さうとする。)

路通。まあ、待つてくれ、待つてくれ。(鬼貫は縁より下りて路通を引出さうとする。路通は雪のなかに倒れる。)

鬼貫。早くゆけ。宿無しの乞食野郎め。(猿を取つて路通に投げつける。路通は頭から猿をすつぽりと被せられて倒れながらに高く笑ふ。)

路通。はゝゝゝゝゝ。さう無暗に腹を立つたよ。さういふ馬鹿固い料簡だから、大事の命を安つぽく捨ててゐる氣にもなるのだ。

鬼貫。なんだ。(縁にある傘を把つて振りあげる。)

路通。(猿から顔を出す。)まあ、待てといふのに……。おれの云ふことがおまへにはよく呑

込めないのだ。

鬼貫。えゝ、ちゃんと判つてゐる。おれに芭蕉

翁の僞筆を書けといふのだ、僞物を作れといふのだ。

路通。さうだ。さうだ。(雪の上に起き上る。)

おれの師匠の芭蕉翁の短冊は、廉くも二分や三分には賣れる。相手によつては二兩も三兩も出すかも知れない。ところが、その直筆の短冊といふものが世間に少い。

鬼貫。それは俺も知つてゐる。

路通。おまへは能筆だ。武家の用だけに、字をかくことは確かに巧い。そのおまへが芭蕉翁の僞筆をかけば、誰でも屹と一杯食はされる。それ、どうだ。短冊を一枚かけば、少くも二分や一兩にはなる、おまへの導引揉療治とは些と譯が違ふだらうぜ。

鬼貫。たとひ幾らにならうとも、人の僞筆をかくて金儲けをする、そんな曲つたことが出来ると思ふか。

路通。それではおまへはやつぱり飢死をする積りか。それとも可愛い娘を賣るつもりか。

(鬼貫は黙つてゐる。)

路通。それともむさく娘を殺して、おまへも一緒に死ぬ積りか。

(鬼貫は矢はり黙つてゐる。)

路通。どうかへとも俺の指圖に附いた方が利口

らしいな。あゝ、あんまり饒舌つたので喉が渇いて来た。(庭の雪を掬つて再び飲む。)

鬼貫。幾度云つても同じことだ。おまへのやうな人間を相手にしてはゐられない。頼むから歸つてくれ。(縁にあがる。)

路通。頼まなくてももう歸るよ。宿無しでも寝るところは何處にかある。久振りで俳諧の

話でもしようと思つたら、とんだ哈嘩になつてしまつた。はゝゝゝゝゝゝ。

鬼貫。(少し考へる。)むかしのお前なら、昔の俺なら、かう云ふ雪のふる晩に、しんみりとした心持で、ゆつくり俳諧の話でも出来るのだがな。

路通。今だつて出来るのだが……まあ、いや。これでお別れとしよう。(菰を被て手拭をかぶる。)たしか其角の句にあつたな。「なき骸を笠にかくすや枯花」おれの姿もそれに似てゐるやうだな。

鬼貫。おれはあんまり好きではないが、江戸の其角はまつたく器用だな。

路通。些と小細工をするが、彼奴なかゝうまいことを云ふよ。

鬼貫。(釣り込まれて起つ。)おまへは此頃一句もないのか。

路通。このあひだの晩、長柄の堤の下に寝てゐると、夜中に霜が眞白よ。(坐る。)おれも眼が醒めてびつくりした。そこでつい一句出たのよ。

鬼貫。なんといふ句だ。(縁を降りる。)

路通。「隠れ家や寢覺めさりと笹の霜」

鬼貫。「隠れ家や寢覺めさりと笹の霜」むゝ、面白、面白い。(これも思はず雪の中に坐る。)いや、おれもこの間の朝、長柄の堤を

通つて一句浮んだよ。

路通。やつぱり長柄の堤で出来たのか。して、その句は……

鬼貫。「川越えて赤き足ゆく枯柳」

路通。なるほど。(うなづく。)赤き足ゆくが見つけ所だな。面白いな。

鬼貫。面白い。

路通。面白い。かうして見ると、鬼貫はまだ殺したくないな。(笑ふ。)

鬼貫。死にたくないな。

路通。いくら哈嘩をしても、おまへと俺とはやつぱり友達だ。あゝ、久振りで面白かつた。(起ちあがる。)どれ、歸らうか。

鬼貫。もう歸るか。(これも起き上る。)

路通。好鹽梅に雪も止んで、薄月が出たやうだ。